
仮面ライダー電王 日常物語

都子あいな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王 日常物語

【Nコード】

N5099G

【作者名】

都子あいな

【あらすじ】

明日は、ナオミちゃんの誕生日。みんなで劇をすることに…。日常物語を連載。

劇をしよう！（前書き）

みんなの戦い以外の日常を書きました。
ひょうい体でご想像下さい。

劇をしよう！

「劇をしよう？」

良太郎が紙を片手に言い放った。

デンライナーにいた全員が顔を啞然てさせた。

「…ああ？」

最初に声を上げたのはモモタロスだった。

「どういうこと？良太郎？」

次にウラタロスが冷静に聞いた。

「いや…、僕もよく分からないんだけど…」

「オーナーが…」

ハナが変わりに説明しだした。

「オーナーが言うには…『明日はナオミちゃんの誕生日です。なので、みんなで劇をプレゼントするように。台本は用意済み』とのことよ」

「い…粹な計らいやな…」

「だから、ここにナオミちゃんがないんだ…」

「ねえ、やろうよ」

「けどよー良太郎…」

「あんた達、いつもナオミちゃんにお世話になってるでしょ？わかってるわよ…ねえ…？？」

「こ…拳に力が入っとる…」

「は…いい！賛成賛成さんせ…いい！」

「リュウタロス…」

「しょうがないね。他ならぬナオミちゃんのためだし？」

「せやな」

「…ッッ…わかったよ！やりやいいんだろ！？やりやあ！」

「みんな…じゃあ…台本配るよ！」

『ロミ男とジュリ江つと』

「……」

「有名なやつをアレンジしたんだね」

「まるわかりやな……」

「あ……配役も決まってるみたい」

ロミ男…ハナ

ジュリ江つと…リュウタロス

側近…良太郎

父親…ウラタロス

父親…モモタロス

ロミ男の婚約者…キンタロス

「……」

「えーと……」

「…うん」

「ハナさんがジュリ江つとじゃないの……」

……

「や、やりましょ……！とつとと！」

「…？（ハナさん…ちよつと泣いてる？）」

―劇練習開始―

「ああ、ジュリ江つと、愛しのジュリ江つと……」

「ああ、ロミ男。なんでお前がロミ男なの？なんでなんで……？お姉ちゃんがいいお姉ちゃんがいい」

「ストップー！」

「ちよつとリュウタ！ちゃんとやりなよ」

「えー…だつてえ」

「リュウタロス、ナオミちゃん喜ばせるんでしょ？」

「…うん。やる…」

「良太郎、やるね」

「ううん。リュウタロスの気持ちだよ」

「ジュリ江つと！ジュリ江つとに会わせてくれ！」

「ロミ男さま〜！私という婚約者がありながら、そんなこと言っなんて酷いやないですよ〜！」

「ストップー！」

「キンちゃんキモいよ…」

「なんやと！」

「うん。言葉いつも通りでいいんじゃない？」

「いつも通り…」

「ロミ男様、お前俺っていう婚約者がありながらちよつとそれは無いと違つ！？」

「恐っ！婚約者恐〜！」

「こんなドスかったらそらロミ男にげるわ〜」

「どっちやねん…」

「お前んとこのロミ男、ジュリ江つとに手出してんだけど。なんとかしろ」

「え〜？それはこっちのセリフだよ？僕のトコの可愛いロミ男に手エださないでくれない？まだ嫁に出す気無いんだけ」

「なんか、変だよ。ウラタロス…」

「え〜？そうかな？」

「かめちゃん。嫁って、ロミ男はお婿さんだよ？」

「ああ、可愛いからつい…ね」

「ちよっと！真面目にやんなさいよ！」

「ジュリ江つと様。ロミ男様が…」

「そんな…ロミ男様が…」

「うん。大分良くなった」

「でも、一本通すだけで限界だね」

「まあ、なんとかなるよ。なんとか」

「あとは、明日だね。」

「楽しみだね」

「次の日」

「みんな。いっくよ」

「うん」

「分かってるって」

「いくで！」

「おー！」

「最初からクライマックスでいくぜ」

「ええ」

「……………」

「終わったあ〜！」

「最後、なんか、ジュリ江つと死なないでロミ男と駆け落ちしたし

「…」

「だってえ…ハッピーエンドのがいいじゃん」

「なんとか、フォローできたしね」

「誕生日だしね…」

「笑ってたしね」

『みんな。ありがとう』

劇をしよう！（後書き）

へたで申し訳ないです。

少しでも楽しんで頂けたなら幸いです。

明日は何の日？（前編）（前書き）

何の日か考えながら、楽しく読んでいただけたら幸いです。（未熟ですが…）

明日は何の日？（前編）

「良太郎さー最近おかしくない？」

リュウタロスがぼそりと言うと、周りが考えだした。

「たしかに…挙動不審率が2・5倍（当社比）だね」と、ウラタロスが嘘臭い数字を述べた。

「そういや…、最近いつもに増して不幸^{ドジ}やなあ…」
キンタロスも同意した。

モモタロスは、それを聞いて、考えたが何も思い当たらなかったらしく、

「そうかあ？」

と、呟いた。そして、全員に白い目で見られる羽目となった。

「馬鹿じゃないの？」

リュウタロスが呟くと、あとは連作だった。

「先輩は観察力がないね。」

「脳みそ干物やな」

「ええ〜！モモちゃん干物なんですかあ〜！？」

ナオミちゃんが声を上げた辺りでプツンと音がした。

「くう〜！お前ら〜！！！」

我慢しかねたようで勢い良く飛びかかってくる。

「第一、脳みそ干物はお前だろ、クマー！」

「ぐう。」

「寝てんじゃねえ〜！話を聞け〜！！」

今日も、デンライナーは賑やかで平和だ。

さてさて、最初、話題だった良太郎は…？

「わわ…わあ！」

どんがらがつしゃーん！と、古典的な騒音が響く。

今日も元気に、不幸をしていた。

のろのろ起き上がりながら、

「あいたた…うわっ！もう、こんな時間！明日までに間に合うかな

…」

と、呟いた。そこへ、

『なーにがだ？良太郎。』

不意に、頭にモモタロスの声のが響いた。

「わ、わ、うわあ！」

再び、あの古典的な騒音が響く。

「いたた…モモタロス…！」

モモタロスは気にせず追求する。

『で？』

「え…？」

『さっきの明日ーっていうの。なんだ？』

良太郎の顔が青くなっていく。

『いやー実はな、あいつらがお前怪しいって…って良太郎』

プツン、と途切れた。正確には途切れさせた。

「危ない危ない」

ふう。と、良太郎はため息をつく。

「せっかく、今まで頑張ったからなあ」

そして良太郎は、目的のため、また動き出した。

「くううう…！！！」

一方、モモタロスはキレル寸前だった。

「完全にシャットアウトされたみたいだねー」

「僕もだめー」

キンタロスは、モモタロスに近ずくと、

「紙、いるか？」

「うるせえうるせえうるせえー」

モモタロスが暴れ出すと、ハナがやってきた。「ちよっと！さつきから何やってんのよ！」

まあ、つまり、『さつきから五月蠅くて他のお客様に迷惑なんだけど何事よ？』って事だ。

このままだと、鉄拳が飛んで来そうなので、取りあえずウラタロスが説明することにする。

「ふうん。そういうこと」

しばらく考える仕草をする。

「取りあえず、思い当たる事は6つだわ」

ハナの言葉に全員の視線が集まる。

「おお…！」

「それは…！？」

ハナは全員の期待に応えて、指で番号を示しながら説明する。「1
モモタロスが嫌いになった。

2ウラタロスが嫌いになった。

3キンタロスが嫌いになった。

4リユウタロスが嫌いになった。

5全員嫌いになった。」

「…」

全員が別々の場所を見ながら、いや、まさか、でも、などとブツブツ言っている。

「あれ？」

子供なだけに切り換えが早いリユウタロスが最初に気が付いた。

「6は？言っていないよね？」

ああ。と、ハナは言って、続きを言う。

「6 それ以外。」

「…」

「さすがハナやな」

「アバウト…」

「そんな答えは聞いてないー」

好きなように言うイマジン達にハナの堪忍袋はパン！と音を立てた。

「あ・ん・た・た・ちー！！！」

そんなこんなで、結局解決されなかった。

「ん？」

イマジン達が一斉に反応する。

良太郎のシャットアウトが緩んだのだ。あくまでも緩んだので、せいぜい微かな声を聞くくらいだが。

「おい。なんか聞こえそうだぜ。」

「みたいだね」「静かにせいや。聞こえへんやろ。」

「おー…」

『も……みんな……あつ……だから……い……お……した……な……でも……な……いらない……かな……ちょっと……多すぎだ……し』

プツン、と音を立てて音は途切れた。

ほとんどの音は聞き取れなかったが、そんな中、聞き取れた音といったら。

「いない…」

「多すぎ…」

「今のつて…」

「良太郎…僕ら嫌になっちゃったの…？」

全員その場で固まった。

ええ？ちよつと何なのよー！？、ハナの声がする。
しかし、その声は誰の耳にも入らない。

と、その時…

突然音楽が響いた。

ハナに電話がかかってきたのだ。

ハナに電話をかける人といったら。

「もしもし？あ、良太郎？」

明日は何の日？後編（前書き）

ほのぼので一切バトルなしですが、それでよろしければご覧になって頂けると嬉しいです。

明日は何の日？後編

「どうしたの？良太郎？」

ハナが聞くと、良太郎は何かしゃべっているようだが、イマジン達には何も聞こえない。そうこうしてる間に電話は終わったようだ。

「分かった。すぐいくわ」

ピツと、簡易な電子音で電話は切れた。

「どうだったんだよ…？」

おそろおそろモモタロスが尋ねると、ハナは笑いながらさあ？と、答えた。

「それ、絶対嘘っぱいよね？嘘は僕の担当なんだけど？」

「バレバレやな」

「今回は答えはききたーい！知らないなんて答えは聞いてない！全員が騒ぎ出した所でハナはうるさくなったらしく、

「うつさい！時間だから行ってくる！」と、行ってしまった。イマジン達の騒ぎはハナが出て行った後も収まらなかった。

一方…

「良太郎、遅れてごめん。大丈夫？」

ハナが問うと良太郎は笑いながら答えた。

「まだ2時だし、ハナさんがきたから大丈夫。」

「どのくらいかかるかな」

「うーん。遅くなるといけないし、ハナさん一応そろそろってときに言ってもらえる？」

「分かったわ」

良太郎は少し考えると、

「ハナさんは何かするの？」

「う…」。私はイマジンは嫌いだったけど…あいつらには世話になっ

てるし…何かしてやらないことも…」

最後辺りはもごもごして濁していた。

不本意そうだが、良太郎には、ハナの照れ隠しに見える。

（ハナさんはなんだかんだいってても、みんなといると楽しそうだからな）

歩きながら話していると、もう着いたようだ。

「あ、ここだよ」

「へえ」

着いたのは品揃え豊富なデパートだ。

「じゃあ入ろうか。」

「そうね」

二人はドアの中に入っていった。

ある程度時間がたち、ハナは先にデジライナーの方に戻ることにした。

それからしばらくして、良太郎は店を出た。

「遅くなっちゃった」

良太郎は、両手いっぱい荷物を抱え、帰り道をふらふらと歩いていた。

「さあ、ついに明日だ」

ぼそつと呟いて家路についた。

明日は何の日？後編（後書き）

後編と、ありますが、完結編の今日は何の日？に続きます。
よろしければ見て下さい。♪

感想募集中です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5099g/>

仮面ライダー電王 日常物語

2010年10月8日11時32分発行